

## 漢訳経典・儀軌の成立事情

—善無畏訳を中心として—

小崎 良行

はじめに

密教経典研究は『大日経』や初会『金剛頂経』等中期密教を中心に、これまで膨大な成果の蓄積がある。その中で密教経典に関する歴史的研究は大村【一九一八】を嚆矢として、これまで様々な先学によって深められてきた。しかし、それらは大村氏の研究しかり梅尾【一九三三】等の研究もインド密教研究に偏っているといえる。また、松長【一九六九】による通史的研究や、祖師伝研究（松長【一九七七】）もあるが、それらの中で『大日経』の漢訳者である善無畏（六三七～七三五）に関する研究はそれほど多くない。さらに、彼が翻訳した『大日経』、講説した『大日経疏』の研究は盛んであるが、それ以外の善無畏訳経典の研究は長部【一九八二】等以外にあま

り見られない。

先行研究によれば、金剛智、不空、善無畏の漢訳した經典・儀軌（以降、「経軌」と呼称）の中には、中国成立と目される編輯經典がかなりみられる。それら編輯經典と目されるものは、彼ら三蔵達の弟子の一群のグループにおいて成立した可能性が考えられる。本稿の目的はこれらの内、善無畏訳と称されて伝わり現存している経軌に注目し、善無畏以降の中国密教の一端を探らんとするものである。

一、編輯經典について（漢訳經典の三分類）

船山【二〇一三】は仏典の漢訳に関して詳細に論じているが、その中で、中国において手を加えて成形された「編輯經典」の存在を明確に定義立て<sup>①</sup>、七つのジャンルに分けられるとした。こういった編輯經典は、善無畏訳経軌においても例外ではないと筆者は考える<sup>②</sup>。なお、船山【二〇一三】では、善無畏、金剛智、不空等によって訳された密教経軌に対する言及は少ない。

【参考】船山氏による七つのジャンル分け

- ① 抄経（抜粋經典）
- ② 異なる訳者の部分訳をつないで一つにしたもの
- ③ 項目羅列型の經典（法数や仏名など）
- ④ 喩え話を集めた經典
- ⑤ 実践マニュアル（戒律儀礼や瞑想法などの手引書）

⑥ 伝記

⑦ その他（中国で編輯した教理学書）

【参考】※船山【二〇二三】一七二頁より

これらはみな、伝統的な意味での「漢訳」（真経）と「偽経」の中間に位置する文献である。すなわち漢訳の一種ではあるが、そのままの形で対応するインド語原典が存在したわけではない点で、純然たる「漢訳」と異なる。他方、経典を偽作しようとする意識がない点や、個々の構成要素には中国特有の文化的要素が認められないという点で「偽経」とも一線を画している。さらに、こうした諸経典は、大抵の場合、伝統的な経録の中で偽経として批判的に扱われることがない点にも留意したい。このようなものを仮に「編輯経典」と呼ぶとすると、漢語の経典は、従来型の二分類と合わせて、以下の三種に分類できる。

(一) 漢訳経典 Chinese Buddhist Translations (CBT)

従来型の「真経」に相当

(二) 編輯経典 Chinese Buddhist Compilation Scriptures (CBCS)

伝統的分類には存在しない新視点。従来型の真経の一部がこれに相当

(三) 偽作経典 Chinese Buddhist Apocrypha (CBA)

従来型の「偽経」に相当

## 二二一、中国密教の事情

インドで興った密教がいつ頃中国へ伝来したのか、まず確認し、さらに中国密教全体について概観したい。

インドでは多数の密教経典が成立し、中国へと傳らされた。先行研究によれば、その最初期は後漢の時代三世紀の前半にまで遡れるという。中国にもたらされた初期の密教経典は、いずれも陀羅尼もしくは占星法を説くものであり、いわば、未整備の雑密経典であり、中期密教の代表的経典である『大日経』『金剛頂経』のように三世密行が説かれていないものであった。<sup>(4)</sup>

中期密教の経典は、インドで成立してから大きな時間差もなく陸海路を通じて玄宗（六八五～七六二）（在位七一〇～七五五）期の中国、唐へと伝わった。<sup>(5)</sup>唐へと伝わった中期密教の経典は、善無畏、金剛智（六七一～七四二）、不空（七〇五～七七四）らによって漢訳された。漢訳された密教経典は入唐八家（最澄・空海・常曉・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡）らによって日本へ傳來され、善無畏、金剛智、不空らの漢訳であるとされ、現存し伝わっている。しかし、先述したように、それら全てが彼ら三蔵の漢訳であると看做すことは出来ず、彼ら以降に彼らの影響下、あるいは彼らの弟子たち一群のグループによって中国において成立したものもあると言えよう。

さて、山口【二〇一六】では、中期密教の経典が將來された頃の中国密教の特色を「請來期」・「展開期」に分けられると述べている。そのうち請來期は善無畏や金剛智らによって、『大日経』や『略出念誦経』等が漢訳され、中国に密教が拡がる礎が築かれた時期であり、展開期は次の項目分けに見られるような特色があるという。

【参考】中国における中期密教の展開期 ※山口【二〇一六】一一三頁より

- (1) 護国思想の展開
- (2) 新たな皇帝観の試み
- (3) 速疾成仏の強調
- (4) 唯識教学の導入
- (5) 両部思想及び三部思想

また、インド後期密教の経典も中国に伝えられ漢訳されている。しかし、それらは一応翻訳されたにとどまり、実践化・信仰化されることはなかったという。なお、それらの一部は平安後期の日本にも送られた。<sup>6)</sup> ここまで中国密教を概観してきたが、以降は善無畏訳について見ていきたい。

#### 二二一、善無畏訳の事情

善無畏は開元四（七一六）年に陸路、長安に入り、開元二三（七三五）年に入寂するまでの二〇年程を長安と洛陽で過ごした。ここではまず、善無畏訳経軌の経録への入蔵を確認したい。

#### ○『開元録』

大毘盧遮那成佛神變加持經七卷（第七の一巻、是れ念誦法なり）

蘇婆呼童子經三卷（唐に妙臂童子と云う。亦、蘇婆呼律と云う。或いは二卷なり）

蘇悉地羯羅經三卷

(唐に妙成就法と言う。此れ蘇婆呼と並びに是れ呪毘奈耶なり。曾て大曼荼羅に入らざれば、合に輒く読むべからず。未だ受具せざる人、戒律を盜聽するに同じ。便ち盜法と成す)

虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法一卷

(梵本の金剛頂經成就一切義品より出づ。略して少分を訳す)  
右、四部一十四卷、其本並びに在す<sup>7)</sup>

○『貞元録』

大毘盧遮那成佛神變加持經七卷

(第七の一巻、是念誦法なり。開元十三年、東都大福先寺に於て訳す)

蘇婆呼童子經三卷

(唐に妙臂童子と云う。亦、蘇婆呼律と云う。或いは二巻なり。開元十四年、東都大福先寺に於て訳す)

蘇悉地羯羅經三卷

(唐に妙成就法と言う。此れ蘇婆呼と並びに是れ呪毘奈耶なり。曾て大曼荼羅に入らざれば、合に輒く読むべからず。未だ受具せざる人、戒律を盜聽するに同じ。便ち盜法と成す。開元十四年、訳す)

虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法經一卷

(梵本の金剛頂經成就一切義品より出づ。略して少分を訳す。開元五年、西明寺菩提院に於て訳す) 右四部一十四

卷、其の本見<sup>8)</sup>に在す

このように、経録が記録しているのは『虚空藏求聞持法』一卷、『大日経』七卷、『蘇悉地経』三卷、『蘇婆呼

『童子経』三巻のみである。先行研究によれば、善無畏の訳出及びその撰述に係るものは、この他、二二部三一巻であるとされている<sup>9)</sup>。しかし、そのほとんどは中国の記録において見出すことが出来ず、入唐八家の将来録に記録されているものがほとんどである。なお、記録されていないものに関して、『阿婆縛抄』や『覚禪鈔』に記録が見られ、実際に『大正蔵』にも収載されていることから、日本において善無畏訳と看做されて伝承されてきたことが確認できる。

なお、大村【一九一八】は『大正蔵』に未収載の善無畏に係る史料として、『五部心観』（具名『惺多僧藥哩五部心観』）と『心地秘訣』（具名『最上乘受菩提心戒及心地秘訣』）を指摘している。『五部心観』は善無畏系の『金剛頂経』を見出せる貴重な史料として注目されている。また、『心地秘訣』は、『無畏三蔵禪要』の別行本とされ、『無畏流出一行記』として日本に将来された史料である。

#### ☆経録への入蔵…四部一四巻

#### ☆将来録の記録…二一部三一巻

以降では、中国密教の展開過程を確認する視点として『大日経』を中心とした善無畏訳経軌に見られる五字厳身観、そして金胎合行化について見ていきたい。なお、五字厳身観が『大日経』から儀軌（胎蔵四部儀軌）へ、儀軌（胎蔵四部儀軌）から次第へと展開するなかでの内容変化は、川崎【二〇一四】で詳細に論じられている。その内容変化は川崎【二〇一四】の論考を参照して次節で確認すると共に、本稿ではその先の展開も見していきたい。

## 三十一、中国密教の展開 五字嚴身觀という視点

五字嚴身觀の名称は『大日經』第七卷「持誦法則品」に「五字を以て身を嚴れば、威徳具に成就す。」<sup>11)</sup>と記されていることよって知られる。この觀法は地・水・火・風・空の五大を a・va・ra・ha・kha の五字で表し、その五字を修法者の体の五処に配置して、その身を莊嚴し、本有法身を証得する密教觀法であり、現在、日本においても胎藏法を修法する際に用いられている。また、この觀法は金剛界法の五相成身觀と対をなす重要な觀法であると位置付けられている。さて、五字嚴身觀は善無畏訳經軌、あるいは善無畏に係る物の多くに説かれるが、それらは次の如くである。

## ◎『大日經』前六卷

◎『大日經』「供養法」<sup>12)</sup>「持誦法則品」

## 【『大日經』前六卷の注釈書】

○『大日經疏』（『大正藏』一七九六番、具名『大毘盧遮那成仏經疏』）善無畏口説、一行（六八三〜七二七）記。

## 【『大日經』「供養法」の注釈書】

○『不思議疏』（『大正藏』八五〇番、具名『大毘盧遮那經供養次第法疏』）不可思議撰。

## 【『大日經』「供養法」の類本】

○『要略念誦經』<sup>13)</sup>（『大正藏』八四九番、具名『大毘盧遮那仏説要略念誦經』）菩提金剛訳。<sup>14)</sup>

※『不思議疏』、『要略念誦經』は善無畏に係るものではない。

【胎藏四部儀軌】の内の二本】

◎『撰大儀軌』（『大正蔵』八五〇番、具名『撰大毘盧遮那成仏神變加持經入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便会』）

◎『廣大儀軌』（『大正蔵』八五一番、具名『大毘盧遮那經廣大儀軌』）

【その他】

◎『尊勝儀軌』（『大正蔵』九七三番、具名『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』）

◎『慈氏儀軌』（『大正蔵』一一四一番、具名『慈氏菩薩略修念誦法』）※『尊勝儀軌』と類本関係。<sup>15)</sup>

【三種悉地破地獄儀軌】

◎『三種悉地軌』（『大正蔵』一八、九〇五番、具名『三種悉地破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼法』）

◎『破地獄軌』（『大正蔵』一八、九〇六番、具名『仏頂尊勝心破地獄轉業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』）

◎『破地獄陀羅尼軌』（『大正蔵』一八、九〇七番、具名『仏頂尊勝心破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼』）

※善無畏訳、あるいは善無畏訳と見做されている経軌は「◎」、それ以外の注釈書等は「○」とした。

先述したように、川崎【二〇一四】では、『大日経』から儀軌（『胎藏四部儀軌』）、そして次第へと至る過程での内容変化を詳細に報告している。本稿では儀軌（『胎藏四部儀軌』）から次第への内容変化ではなく、儀軌（『胎藏四部儀軌』）からその他の善無畏訳経軌への展開を見ていきたい。

## ① 『大日経』第七卷と『撰大儀軌』・『廣大儀軌』

五字嚴身觀の裏付となる教理は『大日経』前六卷の諸品に説かれ、『大日経』第七卷「持誦法則品」において整えられた。このような五字嚴身觀の經典（『大日経』）から儀軌（胎藏四部儀軌）への展開過程は川崎【二〇一四】において詳細に論じられているので、参照しながら概略のみ見ていきたい。

・『撰大儀軌』 まず、満足句の真言「*namah samantabuddhanam a vi ra hun khann*」を引用し、さらに『大日経』「秘密漫荼羅品」の偈頌を引用している。第七卷からの引用はみられない。<sup>16)</sup>

・『廣大儀軌』 第七卷の五字嚴身觀を説く部分が、『大日経』「悉地出現品」の記述を加味してやや増広された形で引用されている。その直前には嚙字觀、直後には虚空藏轉明妃の真言、さらに五字嚴身觀で建立した五字・五輪の上下を反転させて地輪を最上に、空輪を最下に觀する五輪器界觀も説かれている。<sup>17)</sup>

## ② 『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』

ここからは、『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』について見ていきたい。<sup>18)</sup> 『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』に見られる五字嚴身觀由来の行法は、『廣大儀軌』所説の行法を踏襲しつつ、それを増広させたものである。<sup>19)</sup> この行法全体を概略すると、(一)嚙字觀、(二)五輪觀、(三)普通真言、(四)三昧耶真言・一切仏心三昧耶印、(五)五輪器界觀、(六)金剛三昧耶真言及び印、(七)降三世真言と分けることが出来る。<sup>20)</sup> (一)～(五)は『廣大儀軌』所説のものを踏襲したものであり、(六)(七)が『廣大儀軌』よりも増広された記事であるが、この増広部分は『金剛頂経』系統の経軌の記事を採用したものである。これは善無畏訳経軌の特徴の一つである金胎合行化の代表的な例である。なお、(七)の真言は「*om nisumha vajra hum pha!*」であるが、この真言は漢訳経軌にはほとんど見られない。よって、増広部分がどの経軌の記事を用いたのか不明である。<sup>22)</sup>

③ 「三種悉地破地獄儀軌」

『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』はもともと存在する記事をベースとしてそれを「増広」しているが、「三種悉地破地獄儀軌」は、もとの記事を単に「増広」する域に留まらず、先行する経軌の記事を基に、そこへ新たな独自の解釈を加えているものである。<sup>23</sup> 「三種悉地破地獄儀軌」では、五字を五仏のみだけでなく、五部・五臓への配当も見られる。これは「三種悉地破地獄儀軌」にのみ見られる配当である。

五字	阿	鏤	藍	哈	欠
五仏	阿闍	阿弥陀	宝生	不空成就	大日
五部	金剛	蓮花	宝	羯磨	虚空
五臓	肝	肺	心	腎	脾
五輪	地輪	水輪	火輪	風輪	空輪
五大	地	水	火	風	空

「三種悉地破地獄儀軌」のうち、「三種悉地軌」<sup>24</sup>と『破地獄軌』<sup>25</sup>ではさらに、建立した五輪曼荼羅に金剛界の尊格を配することが記され、胎蔵の行法に金剛界の要素が組み込まれている。また、『三種悉地軌』では五字を木・金・火・水・土の五行、青・白・赤・黒・黄の五色、酸・辛・苦・鹹・甘の五味、春・秋・夏・冬・土用の五季、魂・魄・神・志・意の五神等に配当している。このような中国的陰陽五行説思想の五字への配当も、どの経軌にも記されておらず、「三種悉地破地獄儀軌」の中でも『三種悉地軌』独自のものである。<sup>27</sup>

ここまで、『大日経』から儀軌（胎蔵四部儀軌）、そして儀軌（胎蔵四部儀軌）からその他の善無畏訳経軌

への展開を確認してきた。この『廣大儀軌』から『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』、そして「三種悉地破地獄儀軌」へと展開していく過程に五字嚴身觀の中国密教的展開が確認できる。続いて、次節では善無畏訳経軌の金胎合行化について見ていきたい。

### 三二一、中国密教の展開 金胎合行化という視点

善無畏訳の経軌に『大日経』と『金剛頂経』それぞれの記事を取り込んだ行法が見られることは、古くは大村【一九一八】において指摘されている。これは後に長部【一九七一】等によって経軌の金胎合行化として論じられた。『大日経』と『金剛頂経』を一つのセットとして捉えるのは、インドには見られない中国密教の特徴の一つである。山口【二〇一六】では「この傾向は不空には見られず、惠果（七四六～八〇五）が第一人者の時代に徐々にあらわれてくる」と述べている。この両部を一つと捉える思想は、空海が真言宗を開宗する際に「両部不二の思想として日本において結実された。

さて、本稿の視点は金胎合行化された善無畏訳経軌にある。先述した『尊勝儀軌』は巻下の冒頭に

今、金剛頂、大毘盧遮那経、並びに釈義十卷。蘇悉地、蘇摩呼、如意輪、七俱胝、瞿醯且怛羅、不空羅索等の経を略して撰集す。<sup>(29)</sup>

とあり、『尊勝儀軌』が梵本からの漢訳ではなく、編輯して成立したと述べられている。<sup>(30)</sup> この記事によれば、『尊勝儀軌』は様々な経軌の記事を利用し編輯して成立したことがわかるが、金胎合行化を考える時、「大毘盧遮那経」つまりは『大日経』系統の経軌、そして「金剛頂」つまりは『金剛頂経』系統の経軌のいかなる記事を利用しているかを考察することによって、善無畏訳経軌の中国的展開の一特徴を見出せる。

前節②でも見たが、『尊勝儀軌』は、『廣大儀軌』所説の行法を踏襲した痕跡が見られ、その行法に『金剛頂経』系統の経軌に見られる記事を取り込んでいる。しかし、具体的にどの『金剛頂経』系経軌の記事を採用したかは見出せていない。『尊勝儀軌』「召請本尊等品」<sup>(2)</sup>には

- (一) 発生真言「唵 嚩日囉 底瑟吒 (om vajra tīṣṭha)」
- (二) 発請真言「唵 嚩日囉 三芒 惹惹 (om vajra samāja jah)」
- (三) 迎請真言「唵 嚩日囉 俱捨惹 (om vajrāṅkuṣa jah)」
- (四) 請入真言「唵 嚩日囉 跛捨 吽 (om vajra pāśa hūm)」
- (五) 請住真言「唵 嚩日囉 建吒 阿 (om vajra ghaṅṭa ah)」
- (六) 堅固真言「唵 薩囉嚩 但他 藥多 毘 三 菩 地 奈 栗 茶 嚩 日 囉 底 瑟 姪 (om sarva-tathagataḥ sambodhi dīḍha vajra tīṣṭha)」
- (七) 灌頂真言「唵 嚩日囉 諾迦 吒 (om vajrodaka tṭha)」

の七種の真言が記されているが、これらは『金剛頂経』系経軌の多くに記されている真言である。『尊勝儀軌』の成立当時、中国において漢訳されて存在した『金剛頂経』系経軌は次のものがあげられる。

- ・『不空訳三卷本』(『大正蔵』八六五番、具名『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』)
- ・『略出経』(『大正蔵』八六六番、具名『金剛頂瑜伽中略出念誦経』)

- ・『撰真实経』（『大正蔵』一八、八六八番、具名『諸仏境界撰真实経』）
  - ・『蓮華部心念誦儀軌』（『大正蔵』八七三番、具名『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』）
  - ・『不空訳二卷本』（『大正蔵』八七四番、具名『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』）
  - ・『施護訳三十卷本』（『大正蔵』八八二番、具名『仏説一切如来真实撰大乘現証三昧大教王経』）
- ※『施護訳三十卷本』は『尊勝儀軌』成立よりも後年の訳出。

これらの記事と「召請本尊等品」とを見た時、(三)の行法や(五)の真言、さらに(一)・(七)に記される真言全てを漏らさず記しているのが『撰真实経』のみであることから、<sup>(32)</sup>『撰真实経』が他の『金剛頂経』系経軌と比較して、最も『尊勝儀軌』「召請本尊等品」との近似性が見られる。<sup>(33)</sup>さらに、『撰真实経』以外の『金剛頂経』系統の経軌において、金剛鈴菩薩の真言は「om vajra vesā」が記されているが、「om vajra ghanta ah」を使用する漢訳経軌は他にない。唯一『五部心観』にのみ、『撰真实経』と同様に、金剛鈴菩薩の真言に「om vajra ghanta ah」が記されている。<sup>(34)</sup>この点は、『尊勝儀軌』・『撰真实経』と『五部心観』の近似性を指摘した、田戸【二〇一八】の論を補完しえる。しかし、前節②で確認した(七)の真言「om nisumbha vajra hum phat」は、『撰真实経』そして『五部心観』には見られないため、『尊勝儀軌』が『撰真实経』と『五部心観』の記事を採用したのか、あるいはその他の『金剛頂経』系の経軌の記事を採用したのか、確定することは出来ない。

#### 四、まとめ

船山【二〇一三】は編輯經典のジャンル分けを「編輯經典は、伝統的に真経と呼ばれているものを経録情報や

経典の内容分析等から再検討し、編輯の痕跡を明確に認めるに至った場合、それを編輯経典と規定するのである。したがって現時点では真経と扱われていても、編輯経典である証拠が後で見つかる可能性は常にある。編輯経典の具体的な数は、将来、研究の進展とともにさらに増えるに違いない」と結び、編輯経典にはまだ議論の余地があると述べる。

船山【二〇一三】が述べるように、漢訳文献を素材に中国で編輯した経典である「編輯経典」は中国において多数存在し、それは善無畏訳においても例外ではない。このことはそもそも、善無畏訳と伝わる『尊勝儀軌』に編輯して撰述されたと記していることから明らかである。しかし、これはいわゆる恣意的に経典に似せて作られた「偽経」とは異なるものである。

中国密教では、金剛智、不空、善無畏等著名な密教僧の訳出によって存在した漢訳経典を基に、彼らに仮託された密教経軌が多数編輯されたと先行研究では指摘される。これら編輯された経軌は、当時の中国密教において実際に流布され修法される際に使用されていたと考えられる。そして、中国において様々な展開をみせ、当地に受け入れられていったのであろう。それらは入唐八家たちによって日本へ将来されて現存し、彼らの訳出であると伝承されてきた。さらに、善無畏訳経軌においては経典に説かれていた記事が儀軌に至る際に増広され、中国独自の展開を見せている。こういった展開が見られることが漢訳経軌成立事情の一特徴であると言える。

◎参考文献

大村【一九一八】…大村西崖『密教発達志』（仏書刊行会図像部、

一九一八。一九七二年復刻）

小崎【二〇一六】…小崎良行『尊勝仏頂脩瑜伽軌儀』『尊勝真言

持誦法則品』について』（『智山学報』六五、二〇一六）

- 小崎【二〇一八】…小崎良行「善無畏皈依の経軌成立過程について」  
〔印度學佛敎學研究〕六七一、二〇一八〕
- 小崎【二〇二〇】…小崎良行「尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀」撰集の『金剛頂經』について」〔智山學報〕六九、二〇二〇〕
- 長部【一九七二】…長部和雄「唐代密敎史雜考」(神戸商科大学経済研究所、一九七二)
- 長部【一九八二】…長部和雄「唐宋密敎史論考」(永田文昌堂、一九八二)
- 川崎【二〇一四】…川崎一洗「経、儀軌、次第」『現代密教』二五  
(智山伝法院、二〇一四)
- 木村【二〇一九】…木村秀明「『要略念誦經』と『大日經』供養法」  
〔豊山學報〕六一、二〇一九〕
- 甲田【二〇〇二】…甲田宥咩「惠果和尚以後の密敎僧たち」(高野山大学密敎文化研究所紀要)一五、二〇〇二)
- 佐々木【二〇〇九】…佐々木大樹「漢訳尊勝儀軌の研究―特に『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』を中心として―」(『大正大学総合佛敎研究所年報』三一、二〇〇九)
- 田戸【二〇一八】…田戸大智「『五部心觀』の五相成身觀」(『中世東密敎学形成論』所収、法蔵館、二〇一八)
- 梅尾【一九三三】…梅尾祥雲「秘密仏敎史」(密敎文化研究所、一九三三)
- 干潟【一九三九】…干潟龍祥「仏頂尊勝陀羅尼諸伝の研究」(密敎研究)六八、一九三九)
- 船山【二〇一三】…船山徹「仏典はどう漢訳されたのか―スートラが經典になるとき」(岩波書店、二〇一三)
- 松長【一九六九】…松長有慶「密敎の歴史」(『サーラ叢書』一九、平楽寺書店、一九六九)
- 松長【一九七七】…松長有慶「密敎の相承者」(『東洋人の行動と思想』三、評論社、一九七七)
- 三崎【一九八八】…三崎良周「仏頂系の密敎」(『台密の研究』所収、創文社、一九八八)
- 山口【二〇一六】…山口史恭「中国中期密敎の将来と展開」(『空海とインド中期密敎』所収、春秋社、二〇一六)
- 山口【二〇二二】…山口史恭「中国密敎と禪宗の交渉について」(『豊山學報』六五、二〇二二)
- 頼富【一九九九】…頼富本宏「中国密敎の流れ」(『シリーズ密敎中国密敎』所収、春秋社、一九九九)
- 註
- (1) 船山【二〇一三】一四九～一七六頁参照。
- (2) 大村【一九一八】、長部【一九七一・一九八二】等によっても指摘されている。また、このことは善無畏訳『尊勝儀軌』巻下の冒頭に「今、金剛頂、大毘盧遮那經、並びに釈義十卷。蘇悉地、蘇摩呼、如意輪、七俱胝、瞿曇且怛羅、不空絹索等の經を略して撰集す。」(『大正蔵』一九、三七七下)とあることから明らかである。
- (3) 頼富【一九九九】参照。
- (4) 頼富【一九九九】参照。

- (5) 山口【二〇二六】参照。
- (6) 頼富【一九九九】参照。
- (7) 『大正蔵』五五、五七一下
- (8) 『大正蔵』五五、八七四下
- (9) 『望月仏教大辞典』三、三〇〇五頁、世界聖典刊行協会、一九三三。なお、大村【一九一八】の附録「経軌章疏一覽」三三～三五頁)では、二二部二九巻と指摘されている。
- (10) 慧琳(七三七～八二〇)の『一切経音義』には「開元十年壬戌歳、善無畏三蔵訳出、仏頂尊勝瑜伽念誦法兩巻。」(『大正蔵』五四、五四四上)と記されている。
- (11) 『大正蔵』一八、五二下
- (12) 『大日経』供養法は、漢訳された『大日経』第七巻に説かれており、『大日経』に付属する儀軌である。漢訳『大日経』の第一巻から第六巻までは、無行(六三〇～)が中国に送った梵本を善無畏と一行が漢訳したが、この供養法の部分だけは、善無畏が自ら原典を請来して訳出し、「巻第七」として新たに本経の最後に付け加えた、とされている。木村【二〇一九】参照。
- (13) この経は菩提金剛(生没年不詳)による翻訳經典とされながら、梵文原典およびチベット語訳が発見されていない。さらに、中国の経録にも収録されておらず、日本への将来録においてその存在が確認できる。この経は、古来より『大日経』「供養法」の同本異訳であるとされてきたが、現在の研究では同本異訳説は否定されている。なお、『要略念誦経』の最新の研究である木村【二〇一九】では、『要略念誦経』が『大日経』第七巻よりも整備され発展した形態を持つとした上で、『要略念誦経』は、漢訳された『大日経』第七巻に基づいて作られたものではなく、何らかの原典から漢訳されたものであり、漢訳『大日経』第七巻やPV(Mahāvairocanaśambodhi-sambhaddhapūjāvṛti)とともに、『大日経』供養法を研究する上で重要かつ不可欠な資料である、と評価するものである。」と位置付けられている。木村【二〇一九】参照。なお、今脚注中の○内は筆者が加筆。
- (14) 古来、『要略念誦経』の訳者である菩提金剛とは金剛智(六七～七四一)であり、今経が『大日経』「供養法」の同本異訳であると、安然(八四一～八八九)によって見做されてきた(三崎【一九八八】二四七頁参照)。しかし、前注記においても確認したように、『要略念誦経』と『大日経』「供養法」とが同本異訳の関係であることは否定されており、『要略念誦経』の存在を記録している中国の資料もないため、確実に『要略念誦経』について言える点は、今経の成立年代の下限が恵運によって将来された八四七年であることである。さらに、木村【二〇一九】では「当経(『要略念誦経』)は、恐らく恵運によって請来された時点、即ち八四七年からあまり過らない時期に、金剛智とは別人の来歴不詳の菩提金剛によって訳されたか、あるいは金剛智に仮託するために、金剛智を容易に連想させる「菩提金剛訳」として、訳出あるいは編纂されたと思われる」と指摘されている。

- 木村【二〇一九】参照。なお、今脚注中の○内は筆者が加筆。
- (15) 佐々木【二〇〇九】参照。
- (16) 『大正蔵』一八、八三下
- (17) 『大正蔵』一八、九一中～九三上
- (18) 川崎【二〇一四】において、『尊勝儀軌』、『慈氏儀軌』、『三種悉地破地獄儀軌』に關しては触れられていない。
- (19) 『尊勝儀軌』『大正蔵』一九、三六八中～三六九下
- 『慈氏儀軌』『大正蔵』二〇、五九〇上～五九一下
- (20) 小崎【二〇一六】参照。
- (21) なお、小崎【二〇一八】でも指摘しているように、『尊勝儀軌』と『慈氏儀軌』では修法の順番が若干異なり、また『慈氏儀軌』にのみ説かれる行法もあるが、概ね同様の行法であるため、『尊勝儀軌』の記事を用いた。
- (22) 漢訳圈においてこの真言が見られる経軌は、『尊勝儀軌』よりも後年の訳出であると考えられる。小崎【二〇一六】参照。
- (23) 小崎【二〇一八】参照。
- (24) 『大正蔵』一八、九一〇中～下
- (25) 『大正蔵』一八、九一三上～中
- (26) 『大正蔵』一八、九〇九下～九一一上
- (27) 小崎【二〇一八】参照。
- (28) 山口【二〇一六】二二頁参照。
- (29) 『大正蔵』一九、三七七下
- (30) 『尊勝儀軌』は慧琳(七三七～八二〇)の『一切経音義』に
- 「開元十年壬戌歲、善無畏三藏訳出、仏頂尊勝瑜伽念誦法一卷。」『大正蔵』五四、五四四上」と記されており、開元一〇(七二二)年に訳出されたという伝承が存在する。しかし、『尊勝儀軌』巻下において、編輯して成立したと述べられている点と、『尊勝儀軌』の内容から、現在の研究では『尊勝儀軌』が善無畏による訳出であると看做されておらず(干潟【一九三九】、三崎【一九八八】、佐々木【二〇〇九】参照)、善無畏以降、彼の影響下にある人物あるいはグループの編纂であるとされる(小崎【二〇一六】参照)。よって、『尊勝儀軌』の成立は『一切経音義』が編纂された八〇七年が下限の中国成立であると言えよう。
- (31) 『大正蔵』一九、三六九下～三七〇中
- (32) 『大正蔵』一八、二七三上・『大正蔵』一八、二七三中・『大正蔵』一八、二七三上・『大正蔵』一八、二八〇上・『大正蔵』一八、二八〇上・『大正蔵』一八、二七五中・『大正蔵』一八、二七中
- (33) 小崎【二〇一〇】参照。
- (34) 『五部心観』金剛鈴菩薩(『大正蔵』図像二、九三)
- (35) 船山【二〇一三】、一七三頁。
- (キーワード)  
善無畏 中国密教 『尊勝儀軌』 『慈氏儀軌』